高校生の学習意欲・進路選択と価値志向

ーカリキュラム編成タイプの効果に注目してー

荒牧草平 (大学入試センター)

E-mail: aramaki@rd.dnc.ac.jp

1. 問題の背景と研究目的・分析視角

高校生の学校生活や進路の分化は、高校ランクによる選抜・配分機能、社会化機能、予期的社会化機能、生徒下位文化の分化、トラッキング等の理論/概念によって説明されてきた(陣内 1975; 米川 1978; 藤田 1980; 岩木・耳塚 1983; 武内 1983; 吉本 1984 等)。これらはいずれも高校の序的階層性(垂直的多層性)に起因する効果に注目している。

しかし生徒の多様な個性を最大限に伸張させる(文部省 1995)ことを目的とした、学習指導要領の弾力化等の高校教育改革、少子化による大学入学の容易化や入試の軽量化(荒井 1999)、高校の統廃合や再編整備の全国的な展開(屋敷 2001)等の教育・社会環境の変化により、総合学科等の新しいタイプの学校や学科が設置され、コース・類型制や科目選択制の導入も増加している。カリキュラム編成の水平的多層性に着目し、垂直的トラッキングとは別の次元から、高校生の学習意欲や進路選択を研究する必要性が高まっている。本報告が注目するのも、多様化したカリキュラム・タイプの効果である。

なお、現在の高校生は小学校時代から個性や主体性の尊重を目指す学校教育を受けており、彼らの中にはこれに適応的な価値志向(自己実現志向)が濃淡を伴いつつ浸透していると想定される。カリキュラム・タイプの効果は個人の価値志向に還元されてしまうのだろうか。それとも高校ランクによる配分機能や社会化機能(アスピレーションの加熱と冷却)に匹敵するような効果を持つのだろうか。

ところで、今日の高校教育改革の中心的役割を担う総合学科やその原型となった総合選択制高校の事例研究(岡部 1997; 田中 1999 等)は、科目選択制が理念通りには成立しにくいことを報告している。また普通科を対象とした全国的なサンプリング調査は、文系・理系に分ける伝統的なカリキュラム編成の学校が大半を占め、科目選択の範囲も大学入試科目への効率的な準備に限定される側面が強いことを明らかにした(荒牧・山村 2002)。ここから、各高校が提供するカリキュラムは、大勢としては、生徒の自己実現志向を満たしていないと推測される。このズレが教育改革の進行に合わせて学習意欲が低下した(荻谷 2001)ひとつの理由かもしれない。

い。これらを議論するには、カリキュラム・タイプだけでなく、その評価、特に不満の有無を調べる必要がある。不満が強ければ意欲も低下すると予測されるからである。ただし、カリキュラムがどうあれ、生徒自身の自己実現志向に依存する部分が大きい可能性もある。

本報告は、1)カリキュラム編成の内容・方法および高校ランクの点で多様な学校の生徒を同時に対象とし、2)彼らの自己実現志向やカリキュラム評価の影響も考慮しながら、3)学習意欲や進路希望の形成におけるカリキュラム・タイプの効果を検討する。

2. 研究方法

・データ：カリキュラム編成の内容・方法と高校ランクを考慮して抽出した東京の 27 高校に在籍する 3 年生を対象に昨夏実施した質問紙調査のデータ(併設校からの内部進学者を除く)。

・カリキュラム編成の類型化：近年の教育課程の理念は、生徒の多様な個性への対応、自主性・選択性の尊重の 2 点に集約される。これらへの対応状況によるカリキュラムの分類基準としては、開設科目の内容の多様性、選択の自由度(量と範囲)、学科・コース・類型の設置状況等があげられる。このうち学科・コース・類型による形式的分類は、改革理念への実施的な対応状況を反映しない危険性がある。ここではカリキュラム編成の内容と選択の自由度に注目する。

図 1 カリキュラムの 5 類型と分類概念の対応

内容 \ 自由度	低	中	高
6教科中心	制限型	選択型	自由型
多様な科目			総合型
専門性重視	専門型		

まず内容が「6教科中心」「6教科以外の専門性重視(専門型)」「多様な科目を含む(総合型)」に応じて 3 分類した。専門型が特定の個性に特化する一方、総合型は一校で多様な個性に対応しようとする。6教科中心の場合は含まれる内容に特徴はないが、選択性への対応方法(量と範囲)が多様である。これを考慮し「制限型：選択科目が 6教科内に限定される」「選択型：選択単位数が制限型より多く(10単位前後)選択できる科目も 6教科に限定されない」「自由型：選択単位数がさらに多く(10~25単位)その大半が教科の枠を越えた自由選択科目(履修

しなくてもよい) である」に細分類した。

・**自己実現志向**: 高校選択基準としての「興味・関心」「好きな科目を選べる」「魅力的な学科やコース・類型」の重視度への回答から抽出した主成分 (固有値 2.2: 寄与率 72%)。

・**カリキュラム評価**: 時間割不満 (制約があり希望通りに選択できなかった)、内容不満 (本当に学びたい内容がなかった)、選択後悔 (もっと違う内容を選べばよかった) の3項目。

・**学習意欲**: 内発的学習態度「進路に関係ない科目は学びたくない」「明確な答えがない問題に興味ない」「答えが合っていればいい」への否定的回答から抽出した主成分 (固有値 1.5: 寄与率 48%) と学習時間 (平日の家庭学習時間)。

3. カリキュラムと他の説明変数との関連

表1 カリキュラム・タイプと諸変数の関連

	制限	選択	自由	総合	専門
偏差値 ^a	57	61	50	55	41
自己実現 ^a	4.8	4.3	4.0	9.1	5.8
時間割不満 ^b	13%	15%	18%	56%	13%
内容不満 ^b	7%	4%	5%	5%	10%
選択後悔 ^b	22%	19%	24%	39%	16%

a: 平均値。b: 肯定的回答の%値。

・**高校ランク (偏差値)**: 制限と選択は中上位を中心に幅広く分布し、自由と総合は中位に専門は下位に集中 (ただし、このサンプルの特徴)。

・**自己実現**: 総合が極端に強い。専門も強い。

・**カリキュラム評価**: 時間割不満と選択後悔は総合のみ高い。内容不満は専門が少し高いが大差はない。改革理念から最も遠い制限で不満が少なく、総合で不満が大きいのは興味深い。

4. 学習意欲の重回帰分析

・**内発的学習意欲**: 採択モデルはカリキュラム・タイプを含まない。これによる社会化効果は否定された。偏差値を統制しても自己実現志向と時間割不満は正の、内容不満は負の効果 (表 2 左)。時間割に不満のある者の意欲が高いことは興味深い。不満の強さは学習内容へのこだわりの強さの裏返しであり、それが強い者は満たされなくとも意欲が高いということか。

・**学習時間**: 適合度基準では偏差値のみのモデルが、追加項検定からはカリキュラム・タイプと自己実現志向を含むモデルが採択される。前者の場合、偏差値の効果は 163 分。後者の場合も偏差値の効果は極めて大きい。それを差し引いても総合型と自由型の生徒は有意に学習時間が短い (表 2 右)。自己実現志向の効果は別に考慮しているからカリキュラム・タイプ独自

の効果と言える。図 1 に示したように総合型と自由型は選択の自由度が大きい (= 嫌いな勉強をしなくてもよい)。これらの学校で過ごすうちに努力しない社会化を受けているのか。自分の好きな勉強だけやればよいので学習時間が短くて済むのか。「勉強」以外の活動に熱心なのか。

表 2 有意な説明変数の効果

	内発的学習態度 ^a	学習時間 ^b
偏差値 ^c	.90	偏差値 ^c 150
自己実現 ^c	.79	自己実現 ^c 17
時間割不満	.64	総合型 -23
内容不満	-.57	自由型 -20

a: 10点満点。b: 分。c: max.-min.。

5. 進路選択

説明変数に性別と高校成績を加え、カリキュラム評価を省いて多項ロジット分析 (専門学校進学/高卒: 大学・短大進学/高卒) を行った。適合度基準では偏差値・成績・性別のみのモデルが、検定基準からはカリキュラム・タイプも含むモデルが採択される。いずれの場合も偏差値の効果は大きい。後者の場合、性別・偏差値・成績・進学先によらず、自由型は進学希望率が高く、選択型は低い。総合型は専門学校希望率が高く、大学・短大希望率が低い。制限型は大学・短大希望率のみ高め。専門型は中間。

6. まとめと論点および課題

・**総評**: 何より偏差値の効果が大きく、カリキュラム・タイプ独自の効果の有無は微妙。積極的に認めるとすると以下の可能性がある;

---**学習時間**: 選択の自由度の高さ (自由型と総合型) による努力の低下/効率的学習/「勉強」以外の活動に熱心。

---**進路選択**: 制限型で6教科の強制による大学・短大希望促進。選択型で6教科の非強制と専門教科非開設による進学希望抑制。自由型で効率的カリキュラムによる進学希望促進。総合型で効率的カリキュラムと専門科目開設による専門学校希望促進と大学・短大希望抑制 (劣等感のない冷却か)。

・**自己実現志向**: 主観的学習意欲を強化。カリキュラムが期待通りでなくてもやる気を維持する程度に強固。進路選択には無関係。

・**論点と課題**: カリキュラム・タイプの効果は編成の構造効果か社会化効果か。自己実現志向の限界 (回顧データ・総合との相関)。サンプルと分析方法。カリキュラム内容の検討。等々。

*本報告は科研費補助金による研究成果の一部